

赤穂浪士最年長者の活力は 牛肉の味噌漬けから生まれた

日本人は本当に「忠臣蔵」が好きなんだと思う。大河ドラマでも「忠臣蔵」ものはよくとりあげられる。

昭和三十九年の『赤穂浪士』（大仏次郎作／大石内蔵助役 長谷川一夫 以下同）、昭和五十年の『元禄太平記』（南条範夫作／江守徹）、昭和五十七年の『峠の群像』（堺屋太一作／緒形拳）、平成十一年『元禄繚乱』（舟橋聖一作／中村勘九郎）。

『元禄繚乱』も舟橋聖一の『新・忠臣蔵』を原作とする「忠臣蔵」ものである。

舟橋聖一は第一作の『花の生涯』以来であった。ほかにもエピソード的に、忠臣蔵をとりあげた年もある。

忠臣蔵といえど何といってもその華は討ち入り。

十二月十四日の討ち入りの日には全国のゆかりの地で義士祭が行われる。

高輪泉岳寺、本所松坂町公園、京都市山科区、赤穂市、豊岡市などで義士をしのんで祭りが開かれる。物語のなかでは悪役にされているが、地元愛知県吉良町では名君の誉れ高い吉

良義央らよしなかの歳忌が華蔵寺で営まれる。



大石内蔵助が風邪でふせていた四十七士の最年長者、堀部ほりべ弥兵衛やへえ金丸かなまるに、牛肉の味噌漬

けを送ったという話は割合よく知られている。その際添えられた手紙というのが、京都のある料亭に残されているという。

それによると

「可しか然あ方あより内々到来にまかせ進上致し候、彦根産あめうし黄牛あめうしの味噌漬、養老品ゆえぞとじ故其許ちよつとには重畳ちよつとかと存

じ候、十二日、大石内蔵助、堀部弥兵衛殿」とある。

彦根産の黄牛とあるところから、今でいう高級近江牛肉を差し入れられた弥兵衛老、たちまち風邪など吹き飛ばして、元気を回復したに違いないからう。